

日本におけるユリカモメ *Larus ridibundus* の陸上ねぐら

平田和彦

北海道大学水産学部, 〒041-8611 函館市港町3-1-1

はじめに

ユリカモメ *Larus ridibundus* はおもに冬鳥として日本各地に飛来し(高野 1982), 海や湖などの開けた水面上で夜間の睡眠場所である集団ねぐらを形成する. 国内におけるユリカモメの集団ねぐらについては, 関東では利根川河口沖(日本野鳥の会 1987)や相模湾(唐沢 1991), 関西では琵琶湖や大阪湾(須川 1985)から報告が, 2001年から, 京都府宇治市にある木幡池南池でもユリカモメのねぐらが新規に形成されたとの新聞報道があった(京都新聞社 2001). ここでもほとんどの個体が水面上で夜間における睡眠・休息行動(ねぐら行動)をとっていたが, 一部の個体が池畔にある民家の屋根でねぐら行動をとっているところの確認された(本報告).

日本における既知のユリカモメの陸上ねぐらの観察例は, 大阪府岸和田市の水抜きされた久米田池(風間 私信), 多摩川中流域の中州と河口域の干潟(高木 2000, 高木 私信), 羽田空港の対岸にあたる多摩川河口右岸の埋め立て造成地(桑原 私信)で確認されているだけで, 本報告を含めてもたいへん少ない. 以下にこれらの観察例について述べる.

久米田池では1998年から2003年にかけて少なくとも 4回のねぐら行動が観察された. ただし, ねぐら行動が観察された日はいずれも 1~2月の強風や悪天候の日で, 毎日ねぐらが形成されていたわけではなかった. 久米田池での就峙個体数は最低で 121羽, 最高で 256羽であった(風間 私信).

多摩川中流域に架かる新二子橋付近の中州では1988年 1~3月, 多摩川河口域の干潟では1988年 5月および11~12月にねぐらが観察された. 高木(2000, 私信)によると, 多摩川河口域にはその中央部に島があり, ヨシや低木が生えている. さらに島の下流には, 細長い干潟があった. その干潟へ, 夕方に中流域から移動してきた個体のほとんどが降りて休息し, そのまま日没後も東京湾の海上に移動せずに河口域に残り, ねぐらが形成されていた. 東京湾では冬季, 干潮時間が夜間に偏っているため, 干潟がねぐらとして好適な環境となっていた可能性がある. 新二子橋付近の中州では, ほとんどの個体が陸上で, 一部の個体が足の立つ浅瀬で寝ていた. 新二子橋付近のねぐらでは最低で14羽, 最高で 285羽が確認された. 多摩川河口域では 5月には20羽, 11月には約2000羽, 12月には52羽が確認された(高木 未発表). これらの就峙個体全体に占める幼鳥の割合(以後, 幼鳥率)は, 中流域の新二子橋付近では約51.2~100%と高かったが, 新二子橋付近の一

2007年 5月 2日 受理

キーワード: ユリカモメ, 日本, 陸上ねぐら



図 1. 池畔の民家の屋根で就峙するユリカモメ. 右端の個体のように、頭をもたげて起きている個体もいることがわかる. 撮影時刻:2005年12月31日 2:22

Fig. 1. Black-headed Gulls roosting on the roof of a private house at the edge of Kowata Pond (2:22 a.m. Dec.31 2005)

部の調査日と河口域では齢を確認できなかった(高木 私信). また, 多摩川は人工建造物が林立する市街地の間を流れているため, 新二子橋周辺と多摩川河口域のいずれにおいても周辺に人工建造物が存在しているが, ねぐらとなった中州や干潟からは距離があった.

桑原(未発表)によると, 多摩川河口右岸の埋め立て造成地では2006年8~9月に一時的にねぐらができ, 8月26日18時45分には115羽のユリカモメが, 52羽のウミネコとともにねぐら行動をとっていたのが観察された.

本稿では, 数少ないユリカモメの陸上ねぐらの記録として木幡池における観察記録を報告するとともに, 特に詳細な記録のある多摩川中流域の中州と河口域の干潟における2つの前例との比較, 検討を行なう.

調査地および調査方法

木幡池(34°55'N, 135°47'E)は京都府宇治市における市下最大の池で, マンションや団地を含む住宅街の中に位置する. 木幡池は実際には池ではなく, 堂の川に遊水機能を持たせた一級河川の一部である. 堂の川は木幡池に注いだ後, 一部は山科川へ流出し, 一部は宇治川に注ぐ. 木幡池は南池と中池, 北池の3区画に分かれているが, ユリカモメが集団ねぐらをとるのは南池の北側である. 南池の開水面積は約5aである.

2005年12月28日に集団ねぐらの観察をしたところ, 約200羽からなる就峙個体群のうち, 一部の個体が池の北西畔にある民家の屋根で休息しているのを日没後も確認した. これらの個体が真夜中にもそのまま就峙するのか, あるいは最終的には水上の群れに混じるのかを確認するために, 2005年12月31日2時7分~3時10分, および2005年12月31日23時35分~2006年1月1日0時42分に調査を行なった. 調査では, 屋根の上で就峙しているユリカモメを成鳥と幼鳥とで区別し, 個体数

をかぞえた。

また、調査日の前日の夕方に、木幡池全体で就峙するユリカモメの個体数を成鳥と幼鳥とで区別してかぞえておき、夜間の調査結果と比較、検討した。夜間調査時では暗すぎて成鳥と幼鳥との区別ができないため、個体数は夕方調査時の結果をもちいた。

結 果

夕方木幡池全体に対するカウント調査では、12月30日は成鳥97羽、幼鳥29羽の計126羽を、12月31日は成鳥209羽、幼鳥25羽の計234羽を確認した(表1)。その日の日没後に行なった観察では、両日とも屋根の上におけるユリカモメの就峙を確認した(図1)。屋根には東西南北に傾斜があったが、ユリカモメは池で就峙している個体がみえる南側と東側の斜面のみを利用していた。屋根の上のユリカモメは、12月31日未明の調査では成鳥4羽、幼鳥6羽、不明3羽の計13羽(全体の約10.3%)、12月31日から1月1日にかけての調査では成鳥2羽、幼鳥4羽、不明2羽の計8羽(全体の約3.8%)であった(表1)。すなわち、屋根の上で就峙した個体は全体のごく一部のみであり、大部分の個体は水上で就峙していた。なお、夜間調査で記録された齢が不明の個体は、暗かったため成鳥か幼鳥かを識別することができなかった個体である。

木幡池全体における幼鳥率は、12月30日が約23.0%、12月31日が約10.7%であったのに対し、屋根の上ではそれぞれ約46.2%と50.0%であり、屋根の上では幼鳥率が高い傾向にあった。屋根の上における幼鳥率を過大評価しないために、調査中に記録された最低の幼鳥個体数をもちいた。

いずれの調査日も、屋根の上で確認されたすべてのユリカモメが完全に眠っているわけではなかった。くちばしを背中中の羽毛に突っ込み、完全に眠っていると思われる個体も確認されたが、屋根の上を歩いたり羽ばたいたりするなど、確実に起きていると考えられる個体も数羽確認された(図1)。12月30日未明の調査では、調査開始時の2時7分には屋根の上に13羽のユリカモメが確認された

表1. 木幡池全体と屋根の上でのユリカモメの就峙個体数。

Table 1. Number of Black-headed Gulls roosting in the pond and on the roof of a house.

日付 Date	位置 Roosting site	個体数 Number of individuals				幼鳥率(%)* Percentage of juvenile
		成鳥 Adult	幼鳥 Juvenile	不明 Unknown	合計 Total	
12月30日～ 12月31日	Pond	97	29	0	126	23.0%
	Roof	4	6	3	13	46.2%
12月31日～ 1月1日	Pond	209	25	0	234	10.7%
	Roof	2	4	2	8	50.0%

*幼鳥率=幼鳥/合計

*Percentage of juvenile = No. of juveniles / Total number

が、その後水面にいる群れとの間に何度か行き来があり、2時52分には9羽となった。12月31日から1月1日にかけての調査では、調査開始時の12月31日23時35分には、屋根の上に13羽のユリカモメが確認されたが、1月1日0時0分に水面にいた個体を含むすべてのユリカモメが飛び立った。その後約4分間飛翔し、0時12分には屋根の上で9羽が確認されたが、0時30分には屋根から水面へ1羽が飛び降り、最終的に8羽となった。なお、表1では成鳥と幼鳥を区別してかぞえた時点での個体数を屋根の上で就峙した個体数として示した。

考 察

ねぐらとなっている木幡池南池の周囲には陸地があるにもかかわらず、一部のユリカモメは特定の屋根で就峙した。池周辺で陸上ねぐらの形成が可能な場所としては、ヨシ原と道路、他の建物の屋根などが考えられる。ヨシ原は南池の南畔と東畔に帯状にあり、道路は南池の西側と北側に、池に面した他の建物は南池の北畔西側にそれぞれ存在する。南池と道路の間の狭い陸地には多少の低木や草本があるだけで、ねぐら形成が可能ではあるが、ヨシ原は密に群生しているため、その中でユリカモメが就峙することは困難だと考えられる。道路については交通量が多いため、ユリカモメが安心して就峙できる環境ではない。よって、木幡池周辺でユリカモメが潜在的に就峙できる陸上は、建物の屋根と南池と道路の間の狭い陸地のみであった。

多摩川と木幡池の事例を比較すると、いずれもねぐらとなった陸地の周辺には水域が存在するが、多摩川の場合はすべての個体が陸上で就峙し、木幡池の場合は一部の個体のみが陸上で就峙した。また、陸上ねぐらにおける幼鳥率は、いずれの場所も非常に高かった。

ユリカモメの天敵はハヤブサなどの猛禽類のほか(森岡ら 1995)、ネコなどの肉食獣、カラス類などが潜在的には天敵となりうると考えられる。また、直接的な天敵ではなくとも睡眠を妨害する要因として、ヒトによる攪乱も考えられる。多摩川の実例では、ねぐらとなっていたのが中州や島状の干潟であったため、周囲が流れのある水に囲まれている点で、安全性が高いと考えられる(Hickling 1957)。木幡池の場合は、中州などの周囲を水で囲まれた陸地が池の周辺にはなかったため、屋根というねぐら環境は地上性の天敵が接近しにくいという点で、安全性が高いと考えられる。一方、南池と道路の間の狭い陸地は、ネコやヒトが容易に接近できるため安全性は極めて低いと考えられる。Hickling (1957)は、ユリカモメは常に池の周辺部の平坦な土地よりも、天敵からの防衛機能がより高い小島のような形で存在する陸地をねぐらとして好むとするN. Tinbergenの私信を紹介している。

鳥類の集団ねぐらをもつ役割については、多数の個体が集まることで天敵の接近をより早く察知することができるという説(Zahavi 1971)がある。木幡池のユリカモメのねぐらでは、すべての個体がいっせいに眠りに就くということはなく、真夜中も含め、常に何個体かが起きており、一晩のうちでは

群れの個体位置の入れ替わりもみられた。屋根というねぐら環境は周囲の見通しがよく、天敵の接近をより早く察知するのに適している可能性がある。ただし、ネコとヒトという地上性天敵が接近しにくいという点では、これらの陸上ねぐらと比べて、水上も同等あるいはそれ以上の安全性を有していると思われる。木幡池でねぐらとなった民家の屋根にはまだ面積的に余地があり、屋根の上で就峙する個体が飽和状態に至ることはなかった。木幡池では大部分の個体が水上で就峙していたにもかかわらず、なぜ一部の個体が屋根で就峙したのかについての要因説明は、さらなる情報追加が必要であろう。

また、今回観察されたような小さな池や陸上における小規模なユリカモメの集団ねぐらは日本では非常に少ないが、日本と同様にユリカモメが多数生息するイギリスでは、小さな池やビルの屋上などでも本種の約 200羽からなる小規模な集団ねぐらがごくふつうにみられる(Banks 私信)。また、Hickling (1957)によると、ユリカモメはふつつ開水面をねぐらとして選択するが、干潮時に島のように岩石が水面上に現れていたり、池が部分的に氷結していたりする場合には、そこでねぐらをとる。本稿の事例では、池畔の民家の屋根がHicklingの示す島のような環境に相当したと思われるが、屋根の上が開水面よりも優先して利用されていたかどうかは確認することができなかった。今後ユリカモメのねぐらに関するより多くの情報を集め、なぜ陸上ねぐらは幼鳥率が高い傾向にあるのか、また、なぜ日本ではユリカモメの陸上ねぐらが少ないのかについて議論する必要がある。

謝 辞

高木武氏には多摩川中流域の中州と河口域の干潟におけるユリカモメの陸上ねぐらの観察記録をご提供いただき、文献収集の労をいただいた。千葉県立中央博物館環境教育研究科の桑原和之氏には多摩川河口右岸の埋め立て造成地の、きしわだ自然資料館の風間美穂氏には久米田池のユリカモメの陸上ねぐらについてご教示いただいた。龍谷大学深草学舎の須川恒氏には文献収集の労をいただいた。大阪市立自然史博物館動物研究室の和田岳氏には草稿上有益なご助言をいただいた。British Trust for OrnithologyのAlex Banks氏にはイギリスにおける、文一総合出版の神戸宇孝氏には日本におけるユリカモメのねぐらに関する情報をご教示いただいた。各氏のご厚意に、心からの謝意を申し上げる。

引用文献

- Hickling, R.A.O. 1951. The social behavior of gulls wintering inland. *Bird Study* 4 (4): 181-192.
 唐沢孝一. 1991. ネオン街に眠る鳥たち—夜鳥生態学入門. 朝日新聞社, 東京.
 京都新聞社. 2001年 3月 8日版;ユリカモメのねぐら 宇治の木幡池にも… 京都新聞社, 京都.
 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
 須川恒. 1985. 京都に住みついたユリカモメ. *動物と自然* 152: 2-6.
 高木武. 2000. 多摩川におけるユリカモメの生息状況. *東京湾の鳥類*: 413-469.
 高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 財団法人日本野鳥の会, 東京.

- Zahavi, A. 1971. The social behavior of the White Wagtail *Motacilla alba alba* wintering in Israel. *Ibis* 113: 203-211.
- 財団法人日本野鳥の会. 1987. 港のシンボル・カモメをさぐる. *野鳥* 54(3): 18-20.

Report of Black-headed Gulls roosting on the roof of a house in kyoto, western Japan

Kazuhiko Hirata

Hokkaido University, Faculty of Fisheries. 3-1-1 Minato-cho, Hakodate 041-8611, Japan

Black-headed Gulls *Larus ridibundus* were engaged in colonial roosting during the night of December 30th and 31th, 2005, at Kowata Pond (34° 55' N, 135° 47' E) in Uji city, Kyoto, western Japan. Some of them roosted on the roof of a private house at the edge of Kowata Pond. In Japan, however, it is very rare for the species to roost at sites other than open water. Juvenile gulls accounted for a higher proportion of the flock that roosted on the roof, compared with the flock that roosted in the pond. Further studies are required to better understand the roosting ecology of Black-headed Gulls because detailed information is lacking for Japan.

Key words: Black-headed Gull, Japan, roost on the land, *Larus ridibundus*